

| | | | |
|------|--|------|--|
| クラス | | 受験番号 | |
| 出席番号 | | 氏 名 | |

二〇一四年度

第三回 全統高2模試問題

国語

二〇一四年十一月実施

(八〇分)

試験開始の合図があるまで、この「問題」冊子を開かず、左記の注意事項をよく読むこと。

注 意 事 項

- 一、この「問題」冊子は21ページである。
- 二、解答用紙は別冊子になっている。(「受験届・解答用紙」冊子表紙の注意事項を熟読すること。)
- 三、本冊子に脱落や印刷不鮮明の箇所及び解答用紙の汚れ等があれば試験監督者に申し出ること。
- 四、試験開始の合図で「受験届・解答用紙」冊子の該当する解答用紙を切り離し、所定欄に **氏名**(漢字及びフリガナ)、**在学高校名**、**クラス名**、**出席番号**、**受験番号**(受験票発行の場合のみ)を明確に記入すること。
- 五、指定の解答欄外へは記入しないこと。採点されない場合があります。
- 六、試験終了の合図で右記四、の **■** の箇所を再度確認すること。
- 七、答案は試験監督者の指示に従って提出すること。



□ 次の文章を読んで、後の問に答えよ。(配点 六十点)

われわれは、ほとんど常時、監視されている。監視しているのは、防犯カメラのようなあからさまでわかりやすい装置だけではない。たとえば、クレジットカードを使って買物をすれば、その買物は監視されていたことになり、あなたの購入履歴に記録される。車を運転すれば、高速道路のNシステムに監視されていることになるし、そもそも、携帯電話を使っていれば、あなたがどこにいるのか、その位置情報が監視の対象になっているに等しい。

このように、われわれは、他者のまなざしが、つまり監視が遍在化した社会に向かって突き進んでいる。それは、古典的な監視と次の二点において異なっている。第一に、監視のために囲われた空間を必要としない。われわれは自由に移動する。移動しても、監視の外部に逃れることはできない。その移動の先々で監視され、移動のキセキ^a自体が監視の対象となりうる。第二に、監視の主体が、社会的に一般化したこと。国家とか、警察といった権力や暴力を独占している機関だけが、監視する主体になるわけではない。商店街が設置する防犯カメラが示しているように、A インターネットの例がよりはつきりと示唆しているように、誰もが監視する主体になりうる。監視する「眼」は、多様化し、分散し、この社会に遍在しているのである。

監視研究の最大の古典は、ミシェル・フーコーの研究である。よく知られているように、フーコーは、ベンサムが考案した監獄の設計図、パノプティコン^(注)を、近代の権力の隠喩と見なした。パノプティコンの監視は、しかし、今述べた、現代の監視の二つの条件を両方とも未だもってはいない。つまり、パノプティコンの監視は、対象となる人物の移動を制限する「囲われた空間」を必要とし、「単一の主体」によって担われる。

フーコーが主題化した古典的な近代社会においては、人は、監視に対して拒絶的であった。人は監視されることを嫌がり、「もしかしたら監視されているのではないか」ということに不安を抱いていた。要するに、まなざしが地獄として感受されていたのである。そうした感覚、監視されている可能性への不安が、近代的な主体を形成する、とフーコーは論じたのだった。

だが、現代社会にあっては、人々は監視を必ずしも拒否してはいない。監視(まなざし)は地獄ではない。B、監視

は天国の必要条件であり、人は、自分に差し向けられたまなざしが存在していないかもしれないということにこそ、不安を覚えるのだ。

まずは防犯カメラ。防犯カメラが各地で増加してくる過程では、これに批判的な勢力も少なからずあったが、そうした勢力も、今や急速に小さくなってきた。むしろ、安全な社会には、防犯カメラは必要だ、としてこれを支持する者が多い。防犯カメラは、犯罪者の逮捕に役立ってきた。また、多くの人は、カメラが犯罪の抑止に役立っていると考え、安心感を高めている。

インターネットの広義の監視は、もっと積極的な理由で歓迎されている。インターネットで仕事をしているいくつかの企業は、ユーザー（消費者）に関する**ポウダイ**^bな量の個人データを蓄積している。たとえば、アマゾン、グーグル、あるいはフェイスブック等のソーシャル・メディアが、そうした企業の代表である。これらの企業が提供するサービスを利用することを通じて、われわれは、自分自身の個人情報積極的に提供していることになる。それが、いわゆるビッグデータと呼ばれる、個人情報の蓄積である。こうしたデータが蓄積されるのは、ネット上のサービスを利用することが、そのサービスを提供している業者に、監視されているに等しいからだ。しかし、この監視は、ユーザーには都合がよい、ユーザー・フレンドリーだと考えられている。

どういう意味か。**C**、グーグルで同じ言葉を検索しても、ユーザーによって異なる結果に**辿り着く**。グーグルが用意している解析装置が、ユーザーのそれまでの検索の履歴を基にして、そのユーザーが必要としていると予想される結果を優先させるからである。アマゾンからは、書籍を初めとするいろいろな商品が「おすすめ」される。アマゾンが、ユーザーの購買履歴と、それに類似した他のユーザーの消費傾向とを対比しながら、そのユーザーが買うに違いないと予期される商品のリストを送ってくるのだ。

ポイントは次の点にある。これらのサービスは、個人情報を活用して、その個人が「欲望するだろうこと」を教えてくれるのである。ユーザーは、しばしば、この教えに従い、まさにそれを欲望するようになる。グーグルの検索によって、適確に欲しい情報が得られた、と歓迎する。アマゾンに勧められて、「こんなの欲しかった」と説得されてそれを買う。

しかし、ここでまずは留意しておかなくてはならないことがある。そうしたサービスによって教えられる前には、主体は実際

には、「それ」を欲望したことがなかった、ということ、これである。しかし、監視する側からすると、つまりサービス提供者からすると、ユーザーは、客観的には、「それ」を欲望している人なのだ。ユーザーは、しばしば、その客観的な認定を受け入れる。こうして人は、それまで一度も「それ」を欲望したことはないのに、「ほんとうは『それ』を求めている人」になる。

こうした監視に何か問題があるのか。このような監視によって、われわれは何かを失うのか。何かを奪われているのか。われわれは何も奪われてはいない、むしろ、よいものを与えられている、と言う人の方が多い。防犯カメラによって、安全な街と安心な生活が与えられている。グーグル等の配慮によって、真に欲しいものに効率的に短時間でトウタツ^cできるようになった。

だが、こうした現代的な監視に批判的な人も少なからずいる。しかし、批判者が指摘する問題点は、まったく見当はずれに思える。たとえば、監視によって、あなたのプライバシーが侵される、と言われる。しかしその何が問題なのか。街の防犯カメラには、あなたが誰かと隠れてデートしている姿が映っているかもしれない。しかし、防犯カメラで監視している側は、あなたが誰と交際しているかになんの興味ももってはいない。あなたが困るのは、あなたが万引きでもした場合だけだ。

監視が何かの自由を奪うと主張する人もいるが、それも当たらない。仮に監視の主体が国家であった場合でも、国家権力は、あなたの大事な自由を奪うことはないだろう。あなたは好きな本を読み、好きなことを表現し、好きな人と集会をもつことができる。あなたとしては、犯罪やテロを計画していない限り、自由を奪われることを恐れる必要はない。

というわけで、監視によって奪われるものは何もない、³ と言うべきだろうか。そうではない。監視されることで、われわれは何かを奪われているのだ。

その点を説明するために、補助線を引こう。

人は、さまざまな社会的なコンテキストにおいて、異なる役割を担い、異なるアイデンティティを引き受ける。家庭では、口うるさい父としてふるまい、職場では、実績のある営業課長としてふるまい、そして高校時代の同窓生たちと飲むときには、バカなことばかりを言っているひょうきんな男としてふるまう。これらさまざまな役割を貫通する、骨太のアイデンティティなどどこにもない。むしろ、人は、本来は多重人格である。

D

、普通は人格の解離が生じないのは、どうしてなのだろうか。

異なる社会的コンテキストで人が演じるさまざまな役割を貫通する、積極的な同一性^{アイデンティティ}は何もない。父としての私、会社員としての私、どこかの高校の同窓生としての私、を貫く、積極的な「何か」はない。それらを貫通しているものがあるとすれば、私は、父、会社員、同窓生等のいずれにも^き尽きない、という否定性だけである。それは、積極的には「いずれでもない」という意味である。次のように言い換えることもできる。「父」「会社員」等などの役割との関係においても、「私は他でありうる」ということ、これだけが、すべての役割を貫いている。「他でありうる」という^dヨウソウを、論理学や哲学では「偶有性」と呼ぶ。なぜ、われわれは皆、多重人格者にならないのか。あらゆる人格・役割に^eズイハンしている、この「偶有性」が、積極的な「何か」に転じたとき、人格の多重化^{ll}解離が避けられるのである。

さて、本来の問いに戻ろう。現代社会における「遍在化した監視」は、われわれから何を奪うのか。それは、個人の個人としてのアイデンティティを構成する、この「偶有性」だ。

このことは、現代社会がつき進んでいる方向の論理的な極限を取ってみれば、理解できるだろう。つまり、監視する眼がいたるところに分散し、私がそれらの視野からまったく逃れることができなくなったとしてみよう。私のすべての行動、私についてのあらゆる属性は、常に誰かに観察され記述されているとする。このとき、私は、「記述されたことはすべてではない、私は他でもありえた」と主張する余地を失ってしまうだろう。なぜなら、実際、遍在する監視によって、私の「すべて」が記述されてしまっているからである。これこそ、私の「偶有性」が奪われている状況である。

（大澤真幸の文章による）

（注）パノプティコン……一望監視装置。円環状に配置した建物の中心に監視塔を建て、この監視塔から周囲の建物の部屋を一望的に監視できるようにした刑務所。

問一 傍線部 a、e のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄

A

D

を補うのに最も適当なものを、次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。

ア たとえば イ にもかかわらず ウ したがって エ あるいは オ さて カ むしろ

問三 傍線部1「古典的な監視」とあるが、これについて説明したものととして最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 監視装置を至る所に設置し、監視されている人間が空間の外部に自由に移動できない状態を強制的に作り出すことで、近代社会にふさわしい主体のあり方が形成されていった。

イ 権力を独占的に有する機関が、監視の対象を特定の空間に囲い込むことで、恒常的に監視されていることの不安を意識せざるをえない人間のありようが生みだされた。

ウ 国家や警察などの権力を特権的に行使できる主体が、人々の行動を公的な場面から日常生活に至るまでくまなく監視すること、社会的な不安を醸成していった。

エ 近代的な権力を保持する国家や警察などの公的機関が、囲われた空間の内部に人々を拘束することで、近代的な監視がその後広く人々に受け入れられる素地を作った。

オ 近代の権力主体が、社会の中に分散していた監視のまなざしを、国家という単一の権力装置の中に回収することで、国土という特定の空間内で人々の行動を統制できるようになった。

問四 傍線部2「これに批判的な勢力」とあるが、本文ではそうした「勢力」による、どういう「批判」が取りあげられているか。三十字以内（句読点等を含む）で簡潔に答えよ。

問五 傍線部3「監視されることで、われわれは何かを奪われているのだ」とあるが、これはどういうことを言ったものか。百字以内（句読点等を含む）でわかりやすく説明せよ。

問六 本文の内容に合致するものを、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えよ。

ア 監視が遍在化した社会の出現によって、フーコーがパノプティコンの監視から析出した近代社会の姿は虚像に過ぎないことが明らかになった。

イ 人は本来それぞれの帰属先に応じて多様なアイデンティティを持つ存在だが、メディアが画一化した現代では、そうした多様性が失われつつある。

ウ 防犯カメラが犯罪の抑止に一定の効果を挙げ、人々に安心感を与えたことで、監視の印象が好転し、いまや誰もが積極的に監視を受容しようとしている。

エ 社会の情報化が進展する現代にあつて、ネット上では企業の提供するサービスが消費者の欲望それ自体を操作するといったことも起こりうる。

オ 監視がもたらす効用を安易に過信したり、それに対する表面的な批判に終始したりするだけでは、監視社会の本質的な問題点を見落としてしまうおそれがある。

カ 個々の欲望や内面まで監視しようとする現代社会のあり方に人々は息苦しさを覚え、行きすぎた監視に抵抗を開始しようとしている。

【二】 次の文章を読んで、後の問に答えよ。（配点 五十点）

「美術とは、文字通り、『美』を作り出す『術』である」
これ、私の持論です。

「術」ですから、やっぱり作ることなくして、「美＋術」とはならない。絵筆の走らせ方、彫刻刀の使い方など、創作の「術」をおろそかにしては、「美術」は成立してこないんですね。

では「術」ではなく「美」のほうはどうか。またまた持論を披瀝^{ひれき}すれば、それは「ひとそれぞれ」だと思うのです。赤が美しいというひとあれば、青だ、いや黄色だと好みは多種多様。そしてその多様性のいずれが正解かは、だれにも言うことはできない。百人集まれば百通りの「美」があるにちがいない。もしかしたら私はこの「ひとそれぞれ」という「美」の持ち味に惹^ひかれて、美術との長いつきあいを続けてきたのかもしれませんが。

しかし思うに西洋のキリスト教世界では、「ひとそれぞれ」なんて、これはちょっと理解し難いと考えたのではないでしようか。というのも、唯一無二の神がすべてを価値づける世界では、正義も善も、そして美さえも、最終的には神の意志へと収斂^aしていかざるをえないからです。

例えばカラヴァッジョ。この宗教画家が十六世紀後半から十七世紀初頭のヨーロッパで A されたのもわかる気がします。カラヴァッジョ作「ロレートの聖母」（一六〇三～〇四）には、聖母に祈りを捧げる信徒が描かれています。その信徒のひび割れた足が、鑑賞者に最も近い手前右下に描かれている。「美と醜」「聖と俗」が見事に同居した問題作ですね。「聖なる美」が最高だというなら、汚れたひび割れの足を宗教画の画中で強調するなんて、通常は神への冒瀆^{ぼうとく}です。しかし、その俗人の足に苦難の道という宗教的過程を重ねあわせるなら、汚れやひび割れにも価値の転換¹が生まれてきます。いつの世も、祭壇にひざまずく多くの信者は、日々泥まみれになって働き、様々な軋轢^bを抱えて心にひび割れをおこしている。そういう生活苦にあえぐ多くの人々にとって、カラヴァッジョの絵の世俗性は、信仰を身近に感じとるための有効な手がかりとなりえたのではないか。

「聖と俗」の共存によってカラヴァッジョが人々にもたらしたものの、それは、きれいな B としての信仰ではなく、泥やひび割れや俗悪や野卑といった生活感覚を伴ったリアルな信仰。これは自分自身の問題なんだという当事者意識が感じられる信仰のありかただったのではないか。

本来は唯一無二の真理を求めるキリスト教世界なのでしようけれど、胸に手をあて自問すれば、誰もが感じとれる美的価値の多様性。これをカラヴァッジョは素直に絵画に仕立て上げた。「聖」も「俗」も、「美」も「醜」も共存させうる汎神論的^{はんしんろん}美の視点。美は世界にあまねく存在するという「美のアニミズム」。私の美術への興味の^よ拠り所となっているのも、そういう拡散し遍在する「美」のありようにほかなりません。

「美」という言葉のことを考えるとき、いつも想い出す展覧会があります。

それは「美に至る病／女優になった私」（一九九六）という私自身の個展です。展覧会そのものにも深い思い入れがあります。が、それとともに印象深かったのは、「美に至る病」という日本語タイトルの英訳について、関係者の間でずいぶんもめたことでした。

翻訳家は私のように言いました。

「モリムラが言う『美』って、もちろんBeautyじゃないよね」

私はあわてました。「美」の英訳はもちろんBeautyだと考えていたからです。しかし翻訳家が言うところによれば、Beautyではなく、ここはArtと訳すべきである。例えば「白雪姫」は英語で「Snow Beauty」。「雪のように白くてきれいなお嬢さん」というようなニュアンス。顔立ちとかスタイルとか、そういう表面的な^{みえうわ}見目麗しさを指す語がBeautyだということです。だから芸術作品における「美」のことをいうならそれはArtだと。「君の作品はBeautiful」ではなく、「君の作品はArtistic」と評するのだから褒め言葉にならないというのです。

この話を、フランス哲学を専攻している知人に伝えたところ、さらに新しい提案がありました。知人が言うには、「美をArt

と訳すのもいいが、ここはAestheticsとすべきではないか」とのこと。

Aesthetics（エステティクス）つまり「美学」ですね。モリムラ作品には「美」とはなにかを問うこと、そういう哲学的な美の追究が含まれている。だからエステティクスという語を用いるべきだというのが、知人からのアドバイスでした。

しかし結局、「美に至る病」の英語訳は「The Sickness unto Beauty」と、いたってシンプルな直訳となりました。映画女優に私自身が扮するというセルフポートレイト写真が展覧会内容なんです。キルケゴールの著書『死に至る病』をもじったタイトルであるとはいえ、ここはあえて映画女優という大衆性を組み込み、Beautyを使おうという結論になったのでした。

こうして英訳タイトルも決まり、表向きは

C

となったのですが、私の心中にはこの頃から、ずっとある種のわだかま

りが芽生えていたのです。なにかというそれは、日本語と英語（＝西洋圏の言語）との微妙なズレです。展覧会タイトルの付けかたで学んだように、日本語のばあいは、日常も芸術も学問も、「美人」「美術」「美学」という調子で、すべてにおいて「美」という言葉が共通に用いられます。ところが西洋の語である英語では、日常的な美、芸術的な美、学術的な美に対し、Beauty, Art, Aestheticsと、それぞれにまったく異なった語が割りあてられている。街行くきれいなお嬢さんをながめるのと、絵に描かれた女神を鑑賞するのでは、異なる視線のありかたでなければならぬと、英語による世界の分類法は我々に命じているわけです。

西洋流と日本流、いったいどちらの「美」への関わりかたが優秀なのか、それは私にはわかりません。わかっているのは、洋の東西によって「美」の分類の作法が確実に異なっており、そしてこのズレは、私に大きな混乱をもたらしたという点です。

例えばここに一枚の絵がある。その絵が花鳥風月を描きたいわゆる日本画であったなら、「ああこの絵、美しいねえ」と評することになんの躊躇ちゅうちよもありません。横山大観かぶらきや鏗木清方きよかたには、「美」という言葉がじつによく似合うのです。

しかし西洋美術のばあいはかならずしもこれと同じではありません。ある時は遠近法の正しい在りかたの探究であったかもしれないし、またある時は正確な自然の観察記録であったかもしれない。「美しい」かどうかではなく、「正しい」かどうか、「厳密」かどうか問われるケースも西洋美術にはあったのです。先程例に出したカラヴァッジョを少なからず受け継ぐオランダ・

バロックの巨匠レンブラントには、カラヴァッジョにも似た「聖俗」相半ばする美の同居がありますが、それと同時にこの画家は多くの自画像を残し、デカルト風に「私とは何か」という問いにも行きあたっている。その自我への問いかけに、「美しい」という言葉で答えることがふさわしいかどうかはかなり疑問です。

さらに時代が下り二十世紀初頭、ロシア革命とともに現れたロシア・アバンギャルドの抽象画ともなれば、これはもう、「美しいかどうか」などと D すること自体がブルジョア階級の特権的意識であるとして否定するという、過激な芸術的態度の表明でした。美術にもまた「革命」の時節が到来したというわけです。

そしてマルセル・デュシャン、ヨゼフ・ボイスらが現れる。デュシャンが試みた、既製の便器を置いただけの「泉」というあまりにも有名な作品(?)を、「美しいね、この便器」などと評しても、無意味なのは言うまでもありません。それはArtisticかもしれないが、Beautifulではない。

繰り返しますが、西洋流がよくて日本流は是正すべきであるなどと主張したいわけではありません。そうではなく、言語の違いによって世界の分類法が異なっており、それは「美とはなにか」という問いにも大きく関わってくるという点に注目したいのです。

冒頭で、私は「美は多種多様である」と言明しました。しかしここに来て改めて、「美術は多種多様である」と言いかえるべきかもしれないと思います。美術において、もちろん「美」が問われるケースもあるでしょう。しかしそうではないケースも多々あって、特に現代美術と言われる傾向の中には、「美」以外のテーマが美術の中に頻出します。人種問題、セクシャルアイデンティティ、マイノリティ、観念と物質、イメージ、社会と個人等々、あらゆる問いが発せられ、「美」はそういった多様な美術の内容の一部として位置づけられるにすぎなくなってしまう。

私自身は、正直なところ、「美術とは美を作り出す術である」という私自身の定義を捨てきれずにいます。古風にも、「美に至る病」に罹ることこそが芸術家の使命だと言いたい気持ちでいっぱいです。しかし「美」という日本語が、他の言語圏の人々に対し、そのまま過不足なく流通するかどうかと考えるとき、そこにズレを感じずにはおれないのです。そしてそのズレゆえに、

「美」に寄せていた全幅の信頼が少々、いやかなり揺らぎ出すのです。

「美」とはなにかを論じるまえに、日本語でいうところの「美」自体が検証の対象となるなんて、²「美に至る病」に向かつていたつもりが、「美に至りえない病」を見出してしまったようで、どうもこれは思考世界における厄介な現代病に感染してしまったようなのです。

この「美」への不信とこれからどのようにつきあって行くべきなのでしょう。私は根源的な「美」の迷い子になってしまったのでしょうか。

（森村泰昌「美術、応答せよ！」）

問一 傍線部 a ～ c の語句の読みを書き、その意味として最も適当なものを、次の各群の A ～ O の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

| a 収斂 | | | | | |
|------|----------------|---|----------------|---|---------------|
| ア | 集まって一つにまとまること。 | イ | 高い次元に行きつくこと。 | ウ | すべてのものを委ねること。 |
| エ | おのずと導かれていくこと。 | オ | 高い理想に近づいていくこと。 | | |

b
軋轢

| | | | | |
|--------|--------|--------|--------|--------|
| オ | エ | ウ | イ | ア |
| 悲運や屈託。 | 不和や反目。 | 苦勞や絶望。 | 矛盾や混乱。 | 苦悩や葛藤。 |

c
躊躇

| | | | | |
|---------|---------|---------|---------|---------|
| オ | エ | ウ | イ | ア |
| こらえること。 | ためらうこと。 | こだわること。 | あやぶむこと。 | たじろぐこと。 |

問二 空欄

A

く

D

を補うのに最も適当なものを、次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。

ア 自画自賛 イ 取り沙汰^{ざた} ウ 聖化 エ 絵空事 オ 異端視 カ 一件落着

問三 傍線部1「価値の転換」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 宗教画において世俗性を強調することは、唯一神の神聖さをけがすものだと考えられていたが、卑俗な現実生活にまみれながら救いを求めざるをえない人々のありようを考えると、それは個々人が信仰を日常の中で感じとる契機になることがわかる、ということ。

イ 宗教画において汚れや醜さを際立たせることは、聖なる美を最高のものとする通念に反するものであるが、美は本来多種多様であり人それぞれであることに鑑みれば、どのような描き方から芸術性を感じるかは個人の自由であることがわかる、ということ。

ウ 宗教画において聖母より信徒を強調して描くことは、神の尊厳をおかすこととも言えるが、多くの信徒が苦難の道を歩むことで深い信仰心が生まれるという過程を重ね合わせると、宗教画にとって重要なのは聖母よりもむしろ世俗的な信徒であることがわかる、ということ。

エ 宗教画において聖と俗を同居させることは、聖なる神や美への冒瀆につながるものであるが、いつの世も人間は生活苦にあえぎながら生きていることを考えると、聖を退け俗や醜を描くことにこそ、民衆に寄り添った信仰の本質があることがわかる、ということ。

オ 宗教画において世俗性を重視することは、聖なる美を軽視することだという見方もあるが、日々泥まみれになって働く俗人にとっては俗悪や野卑がリアルな美だと感じられることを知ると、神や聖を美なるものとして崇めることあがの誤りがわかる、ということ。

問四 傍線部2「『美に至る病』に向かっていたつもりが、『美に至りえない病』を見出してしまった」とあるが、それはどういうことか。そのように筆者が言う理由を含め、百字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問五 本文の内容に合致するものを、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えよ。

ア 美術において「美」とは何かという問題は永遠の課題であるが、美術が創作である以上、より重要なのは「術」のあり方であることを忘れてはならない。

イ 何を美しいと感じるかは各人によって異なるうえに、世界の至るところに美しさが潜在していると考えられるところに美術の奥深さがあると言える。

ウ 筆者が自身の展覧会のタイトルの英訳を当初の案から変更しなかった理由の一つは、そこで展示される作品の性質を反映させたかったからである。

エ 西洋と日本で「美」の分類法が異なることで混乱が引き起こされているのだから、「美」の基準を統一するべく、そのあり方を見直すことが急務である。

オ 西洋美術は、神の意志を描くことから出発し、遠近法など正しさや厳密さの探究に向かい、それが成し遂げられると抽象画へと常に進歩を続けてきた。

カ 筆者は、自らの考える「美」の基準から外れている現代芸術よりも、その「美」の基準にかな適う伝統的な日本画の方に高い価値を見出している。

③ 次の文章は、「祭の還さ」という、賀茂祭翌日に賀茂上社から斎院御所のある紫野へ帰る斎院（＝賀茂神社に奉仕した皇女）一行の行列を、花山上皇（＝法皇）が牛車から見物した際の様子を描いたものである。なお、その前日には、花山院の従者（童へ）が往来で乱暴をはたらくという事件があった。これを読んで、後の問いに答えよ。（配点 五十点）

花山院の、一年、「祭の還さ」御覽ぜし御有様は、誰も見奉り給うけむな。前の日、こと出ださせ給へりしたびのことぞかし。さることあらむまたの日は、なほ御歩きなどなくてもあるべきに、いみじき一の者ども、高帽頼勢をはじめとして、御車のしりに多くうちむれ参りし気色ども、言へばおろかなり。なによりも御数珠のいと興ありしなり。小さき柑子をおほかたの玉には貫かせ給ひて、達磨には大柑子をしたる御数珠、いと長く御指貫に具して出ださせ給へりしは、さる見物やは候ひしな。

紫野にて、人々、御車に目をつけ奉りたりしに、検非違使参りて、昨日、こと出だしたりし童へ捕ふべしといふこと出で来にけるものか。このころの権大納言殿、まだその折は若くおはしまししほどぞかし。人走らせて、「かうかうのこと候ふ。とく帰らせ給ひね」と申させ給へりしかば、そこら候ひつる者ども、蜘蛛の子を風の吹き払ふごとくに逃げぬれば、ただ御車副のかぎりにてやらせて、物見車のうしろの方よりおはしましこそ、さすがに、いとほしくかたじけなくおぼえおはしまししか。さて、検非違使つきや、いといみじう辛う責められ給ひて、太上天皇の御名は腐させ給ひてき。

さすがに、あそばしたる和歌は、いづれも人のにのらぬなく、優にこそうけたまはれな。「ほかの月をも見てしがな」などは、この御有様に思しめしよりけることとおぼえず、心苦しうこそ候へ。あてまた、冷泉院に簡奉らせ給へる折は、

世の中に経るかひもなきだけのこはわが経む年を奉るなり

(注)

1 いみじき一の者ども、高帽頼勢……「いみじき一の者ども」は優れた武勇の者たち。「高帽頼勢」は、異様に高い烏帽子をかぶった荒法師。

2 柑子……みかんの一種。

3 達磨……数珠の玉のなかで、留めとなる大玉。

4 検非違使……都の治安維持にあたった検非違使庁の役人。

5 権大納言殿……花山院の従兄弟で、花山院の後見人であった。

6 御車副……花山院の乗った牛車の左右につく供人。

7 物見車……行列を見物していた一般の貴人たちの、並んでいる車。

8 検非違使つき……検非違使が花山院邸を監視したことを言う。

9 ほかの月をも見てしがな……「こころみにほかの月をも見てしがなわが宿からのあはれなるかと」(『詞花和歌集』)。

10 冷泉院……花山院の父。

問一 二重傍線部 a「候ふ」・b「給へ」・c「奉ら」について、

i 敬語の種類として最も適当なものを、次のア～ウの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア 尊敬語 イ 謙讓語 ウ 丁寧語

ii 誰から誰への敬意を表しているか、次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。なお、同じ記号を何度用いてもよい。

ア 花山院 イ 冷泉院 ウ 権大納言殿 エ (花山院の) 従者 オ 人々 カ 語り手

問二 傍線部1「言へばおろかなり」の解釈として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 花山院の容姿など口に出すのもばかげている。

イ 花山院一行の無礼なふるまいは言うまでもない。

ウ 花山院の従者の横暴な態度は評判どおりだ。

エ 花山院一行の奇抜な様子は言葉では言い尽くせない。

オ 花山院のことについては口にするのも恐ろしい。

問三 傍線部2「若くおはしまししほどぞかし」・5「あそばしたる」・6「見てしがな」を現代語訳せよ。

問四 傍線部3「かうかうのこと」とはどのようなことか。四十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問五 傍線部4「さすがに、いとほしくかたじけなくおぼえおはしまししか」について、

i 傍線部の現代語訳として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 威厳があつて、とても恐ろしいほどすばらしく思われていらつしやつた。

イ やはり、気の毒で恐れ多いことだと思われていらつしやつた。

ウ 高貴ではあるが、いじらしくて恐縮していらつしやつた。

エ なるほど、かわいそうでもったいないことだと思ひになつた。

オ なんととっても、美しくて尊いことだと思ひになつた。

ii 傍線部は、花山院の、どのような様子について言つたものか、わかりやすく説明せよ。

問六 本文中の空欄に入る最も適当な語を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 口 イ 手 ウ 肩 エ 頭 オ 目

問七 傍線部7「たけのこ」は、誰のことを言ったものか、本文中の語で記せ。

問八 『大鏡』と同時代同時期に成立した同じジャンルの作品を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 宇治拾遺物語 イ 増鏡 ウ 吾妻鏡 エ 雨月物語 オ 栄花物語

④ 次の文章を読んで、後の問に答えよ。（設問の都合で、送り仮名を省いたところがある。）（配点 四十点）

広徳軍、祠山張大帝、初發靈時、嘗化為猪、以治水。故郡人

多不食猪、自為諱物。郡人事之甚謹、戒不食猪肉。唐人羅

隱、名彰天下。所至之处、鬼神無不為之譏諷。嘗過其廟、題

詩於壁曰、

A 踏遍天涯路

平生不信 a

① 方欲題後二句、俄手如二人拽起狀、聞人語曰、「若後二句

不佳、能折爾手。」羅悚懼曰、「如不佳、甘照神語。」

手遂如故。續題曰、

B 祠山張大帝

天下鬼神爺やナリト

(『湖海新聞夷堅統志』による)

(注)

- 広徳軍……地名。
- 祠山……山の名。
- 張大帝……祠山に祭られた神の名。
- 発_レ霊……不思議な力を發揮する。
- 郡人……広徳軍の住民。
- 諱物……はばかり避けるべきもの。
- 唐人羅隱……唐代の詩人羅隱。
- 譏諷……詩の中で悪く言う。
- 廟……神を祭る建物。
- 題……書きつける。
- 天涯……この世の果て。
- 拽起……引っ張り上げる。
- 悚懼……恐れてすくむ。
- 天下鬼神……ここでは「天下」は「この世にくらべるものがない」の意味。
- 爺……高貴な者に対する尊称。

問一 傍線部ア「故」、①「能」の読みを、送り仮名も含めてすべて平仮名で記せ。

問二 傍線部①「方欲」題「後二句」を書き下し文に改めよ。

問三 A・Bは、合わせると一つの詩になる。この詩の形式を漢字四字で答えよ。

問四 空欄 **a** を補うのに最も適当な語を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 鬼 イ 神 ウ 霊 エ 邪 オ 悪

問五 傍線部②「如不_レ佳、甘照_三神語_二」の解釈として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 続きの詩句があなたの気に入るものでなかったら、あなたは本当に私の手を折るつもりなのか。

イ 続きの詩句があなたの気に入るものでなかったら、私はもう詩を作ることをやめるつもりだ。

ウ 続きの詩句があなたの気に入るものでなかったら、私はあなたに手を折られてもかまわない。

エ 続きの詩句があなたの気に入るものでなかったとしても、あなたが私の手を折ることはできない。

オ 続きの詩句があなたの気に入るものでなかったとしても、私は詩を作ることをやめるつもりはない。

問六 二重傍線部「手如_三人拽_二起伏_一」とあるが、誰がどのような目的で羅隠に対してこのようなことをしたのか。五十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

